「日本海海戦 東郷平八郎と秋山真之」メモ

●日露戦争といえば「陸の乃木希典、海の東郷平八郎」

▽ガリ元国連事務総長 来日の都度 東郷神社参拝
　小学生の頃 教科書の日本海海戦に感激

▽ロシアに いじめられたり 侵略された国では
　バルチック艦隊を破った東郷は 英雄
　「東洋の奇跡」と称賛された 戦いだった

▽日本では 平成元年３月 新学習指導要領で
　東郷が 小学校６年の社会科教科書に

歴史学習で取り上げるべき人物４２人

卑弥呼 聖徳太子 小野妹子 中大兄皇子 中臣鎌足 聖武天皇 行基 鑑真 藤原道長 紫式部 清少納言 平清盛 源頼朝 源義経 北条時宗 足利義満 足利義政 雪舟 ザビエル 織田信長 豊臣秀吉 徳川家康 徳川家光 近松門左衛門 歌川(安藤)広重 本居宣長 杉田玄白 伊能忠敬 ペリー 勝海舟 西郷隆盛 大久保利通 木戸孝允 明治天皇 福沢諭吉 大隈重信 板垣退助 伊藤博文 陸奥宗光 東郷平八郎 小村寿太郎 野口英世

●日本海海戦とは、どんな戦いだったのか

世界の三大海戦

①サラミスの海戦(紀元前480年)
　劣勢を伝えられたギリシア・アテネ艦隊が、アテネ西方のサラミス湾でクセルクス大王のペルシア大艦隊を破る

②トラファルガーの海戦(1905年10月21日)
　ネルソン提督(1758～1805)率いるイギリス艦隊が、トラファルガー岬沖合でフランス・スペイン連合艦隊を破る。ネルソンは戦死したが、ナポレオンの英本土上陸を阻止し、「救国の英雄」に

③日本海海戦(明治38年5月27日)

▽「ロシア優勢」の声が 圧倒的だった

▽ルーズベルト米大統領は「日本勝利の可能性はせいぜい二〇％だろう。日本艦隊が敗れた場合、日本は滅亡の悲運に遭遇するであろう」

乃木　希典(のぎ・まれすけ)

嘉永2(1849)～大正1(1912)　長府藩出身。陸軍大将。西南戦争に連隊長として出征、軍旗を奪われる。ドイツ留学を経て日清戦争で歩兵第1旅団長。明治29年台湾総督。日露戦争では第3軍司令官として旅順を攻略、多大な死傷者を出す。40年学習院長となり昭和天皇の教育に当たる。明治天皇の大葬当日、静子夫人と共に自邸で殉死した

東郷　平八郎(とうごう・へいはちろう)

弘化4(1847)～昭和9(1934)　薩摩藩出身。海軍大将・元帥。薩英戦争、戊辰戦争に参加。明治4年イギリスに留学し11年帰国。この間1年10か月ウースター商船学校に学ぶ。天城、大和、浅間艦長歴任。27年浪速艦長となり高陞号撃沈事件を起こす。海大校長、常備艦隊長官、舞鶴鎮守府長官を経て37年10月再び常備艦隊長官。12月連合艦隊長官に就任、日本海海戦でバルチック艦隊を破り、「海軍の神様」と仰がれる。昭和5年、ロンドン会議で軍縮反対派に担がれ軍縮条約に強硬に反対、海軍分裂の一因となる

セオドア・ルーズベルト(Theodore Roosevelt)1859～1919 米第26代大統領。積極外交を推進し、日露講和を調停した

ル大統領の忠告

海戦直前、わざわざ日本公使館付海軍武官を呼んで、「日本海軍の訓練と士気は、ロシアに優っているに違いないが、その艦隊と勢力は、四十余隻より成るバルチック艦隊に比べ遥かに劣っているから、大挙して決戦を試みるのは危険だ。まず水雷艇を台湾海峡、朝鮮海峡に配置してロシア艦隊を部分的に撃沈

▽根拠は 戦艦の数の違い
▽日本は 山本権兵衛海相が
「六六艦隊」(戦艦6隻 1等巡洋艦6隻)を作り 日露戦争に
▽初瀬 八島が ロシア機雷に触れ沈没 戦艦は４隻
バルチック艦隊は ２倍の８隻
▽「海上決戦は、大艦、大きな大砲の数で決まる」

	12吋砲	10吋砲	9吋砲	8吋砲	計
日 本	１６	１	０	３０	４７門
ロシア	２６	１５	４	３	４８門

●バルチック艦隊は３７年１０月１５日、リバウ出航

日本国内の不安は高まった

読売新聞は、「将に来らんとする波羅的艦隊」と軍艦の写真連載を始めた。それから7か月余り、新聞にはどの港に寄ったとか、この辺りを航海中とか、艦隊の記事が載らない日はなく、消息記事の後には必ず銃後の心得が書いてあった。38年4月8日、読売では発行1万号祝賀パーティーを開いていたが、英商船がシンガポール沖でバルチック艦隊を見たという電報が入ってきて、社員は急遽社に戻り号外を発行。「皇后の奇夢」— 美子皇后(昭憲皇太后)の夢枕に白装束の武士が現われて平伏し、「自分は幕末において多少の働きをした土佐の坂本竜馬であります。このたびの海戦は、日本の勝利に間違いありません」皇后は竜馬をご存じなかった。田中光顕(宮内相)が竜馬の写真を探し出してご覧に入れると、「確かにこの人だ」どの新聞にも取り上げられ、大変な評判になった。

▽「あんな大艦隊が来たら、日本は滅亡するのじゃないか」 国を挙げて ノイローゼ気味に

●海戦の結果は、日本の大勝利だった
▽対馬海峡を突破しようとした３８隻のうち
・撃沈＝戦艦６隻を含め１９隻 ・捕獲＝戦艦２隻など７隻 ・逃走中沈没や武装解除など＝９隻 ・ウラジオストックへは＝駆逐艦など３隻 ・捕虜＝司令長官ロジェストウェンスキイ中将以下６千人 ・戦死＝４千５百人

する策をとり、一隻でも軍艦を大切にして持久戦に備えるのが賢明だ。そうすれば、根拠地を持つ日本が最後の勝利を収めるに違いない」

山本 権兵衛(やまもと・ごんべえ)
嘉永5(1852)～昭和8(1933) 薩摩藩出身。海軍大将。薩英・戊辰戦争に参加。明治10年から独軍艦に乗組み世界周航。26年大佐で海軍省主事、28年軍務局長。31年11月山県内閣海相となり39年まで在任。大正2年、12年首相

昭憲皇太后美子(しょうけんこうたいごう・はるこ)
嘉永2(1849)～大正3(1914) 京都生まれ。明治天皇の皇后。左大臣一条忠香の三女。女子教育振興、博愛社(日赤)など社会事業に尽くされ和歌3万6千首を残す

坂本 竜馬(さかもと・りょうま)
天保6(1835)～慶応3(1867) 土佐藩出身。幕末の志士。脱藩して神戸で海軍操練所設立に尽力。長崎で海援隊を経営、海運業に従事。薩長連合を成立させ、大政奉還実現の道を開いたが京都で暗殺

田中 光顕(たなか・みつあき)
天保14(1843)～昭和14(1939)土佐藩出身。元老院議官、会計検査院長を経て明治22年警視総監。宮中顧問官、学習院長を歴任。31年宮内相となり、42年に退任するまで宮中内に大きな勢力を築く

田中の作り話

皇后の見た夢を、誰かが意図的に洩らさない限り下々の新聞記者が知るはずもない。不安鎮静に、皇后を利用した作り話だったのではないか。「明治維新は、薩長土肥によって成った」といわれながら、土佐は影が薄かった。出征軍の軍司令官、艦隊長官を一

▽日本側の損害 水雷艇３隻沈没 戦死１１６人

●佐藤鉄太郎中佐(第2艦隊参謀、のち中将)は「運だった」

「人間の力で開いた四分の運」

戦いが終わった後、佐藤は先輩から「どうしてあんなに勝てたのだろう」と聞かれ「六分どおり運でしょう」先輩も大きく頷いて、「僕もそう思う。しかし後の四分は何だろう」「それも運でしょう」「それじゃ全部運じゃないか」佐藤は「最初の六分は本当の運です。しかし後の四分は人間の力で開いた運です」

戦後海大教官になった佐藤は、戦術の講義で学生たちに話している。「東郷さんは不思議なほど運のいい人であった。戦いというのは主将を選ぶのが大切である。主将がいかに天才でも、運の悪い人ではどうにもならない」

●「運のいい男」東郷

▽開戦直前まで 舞鶴鎮守府長官
　年齢も５５歳 予備役編入を待つばかりだった

▽常備艦隊長官は 日高壮之丞中将
　戦争になって 連合艦隊が編成されれば
　そのまま 長官の椅子に座ると 思われていた

▽山本海相は 東郷を 電報で呼び出し
　常備艦隊長官を 要請した(明治36年10月17日)
　「万事、中央の指図通りに動いて貰わねば困る」

▽東郷が 山本に確認を求めたのは ２点
　・参謀だけは 自分に選ばせて貰いたい
　・戦地に赴いたら 大方針は別として
　　その他の駆け引きは 一切 任せて貰いたい

▽東郷が 佐世保(常備艦隊根拠地)に 着任したとき
　猫背で トボトボ歩く姿に
　「こりゃあダメだ」と思った士官も 多くいた

▽明治天皇も 意外に思われたらしく
　理由を聞かれた山本は
　　「東郷は、運のいい男ですから」

●明治２６年、山本海軍主事は西郷従道海相に迫り、老齢幹部９７人の整理を断行した

人も出していない。この機会に、土佐と竜馬を売り込みたいとの魂胆も。一部の人にしか知られていなかった竜馬は、一躍幕末のヒーローに。

ロジェストウェンスキイ(Z P Rozhdestvenskii)1848～1909　ロシア海軍中将。長年侍従を務め、日露戦争のとき第2太平洋艦隊(バルチック艦隊)司令長官となり、長駆極東に向かったが、日本海海戦に敗れ捕虜となった

日高　壮之丞(ひだか・そうのじょう)
嘉永1(1848)～昭和7(1932)　薩摩藩出身。海軍大将。橋立・松島艦長、海兵校長を経て明治35年7月常備艦隊長官。36年10月舞鶴鎮守府長官

東郷起用には山本の決断

山本海相は考えた。人間の能力というものは、そんなに差異はない。しかし、そのわずかな差を重く見たい。日高は口も八丁、手も八丁。そのため必ずしも大臣の訓令通りに動かない。また、平素は頭の回転も早く、平均点8点なり9点の人が、実戦となると、平素の力を発揮できず、5点になったり4点になったりする。その点、東郷はいざという時には、普段の6点をそのまま発揮する。

西郷　従道(さいごう・つぐみち)
天保14(1843)～明治35(1902)薩摩藩出身。海軍大将・元帥。西郷隆盛の弟。明治2年フランスに留学。6年陸軍大輔。11年参議となり、この間文部卿、陸軍卿を兼務。18年内閣制度発足と共に初代海相。内相を経て26年再び海相となり日清戦争中は陸相も兼務。31年再度内相。元老

▽将官８人 薩摩出身者も多く 維新の功労者ばかり
太っ腹で知られる西郷も ひるんだが
山本は「日本の海軍は
裸にダンビラを差したようなもの」

▽「古い頭では、どんどん近代化されていく軍艦を動かすことが出来ない。功労者には勲章をやればよい。実務につけると百害を生む。いざ戦になって、戦える海軍にするには、兵学校で基礎から新しい教育を受けた若手士官を登用しなければダメだ」

●東郷は「高陞号撃沈事件」を起こす

イギリス世論を激昂させる

明治27年7月25日、浪速など3隻の巡洋艦が朝鮮・仁川沖の豊島で清国巡洋艦2隻とすれ違ったとき、清国側の発砲で豊島沖海戦となった。

そこへ英国旗を掲げた汽船高陞号(こうしょうごう)がさしかかった。東郷が停船を命じ、士官を派遣して調べさせると、船長ら3人の英人が乗っている英国船籍の船で、清国兵1200人、大砲を朝鮮に輸送中とわかった。拿捕するため「浪速についてこい」と命じると、兵隊が船長に銃を突きつけ騒ぎ出した。3時間経過し、東郷は「即時船を退去せよ」と信号した上で、浪速のマストに赤旗を高く掲げさせた。戦時国際法で「これから砲撃する。危険なり」という合図で、東郷は船長らが海に飛び込んだのを確認すると砲撃を命じ、高陞号を撃沈した。

イギリスの新聞は、日清戦争の宣戦布告(8月1日)前に英船が撃沈されたというので、「野蛮人の暴挙」「極東の無法な国」と非難し、英外務省も責任者の処罰を求め、厳重抗議してきた。

▽伊藤博文首相は「国家非常の時に
かかる軽率な軍人が出るのは遺憾至極」

▽「艦長を軍法会議にかけろ」「即時罷免すべし」

▽ところが 英国際法の２人の権威(オックスフォード大学)が「戦時国際法の如何なる条章に照らしても、日本軍艦浪速艦長の執った処置は、適法にして一点の非難すべき所がない」

▽論文を掲載したタイムズも 社説で 東郷を支持

東郷は10年前、クビの予定

明治26年の予備役編入リスト、16人の大佐の末尾には、病気がちで、45歳の東郷の名があった。5歳年下の山本は「大佐大臣」と異名をとるくらい、海軍改革に辣腕を揮っていた。

西郷海相の前で、一人一人確認していったが、最後の東郷の所へ来ると「この男はもう少し様子を見ましょう」西郷が人事局長に「どこか嵌めておく所があるか」と尋ねると、山本はその返事も待たずに「横須賀に繋いである浪速にでも乗せておきましょう」

その頃の日本海軍は、軍艦の半分は予備艦として保安要員を乗せているだけで、港に繋いでいた。新鋭巡洋艦浪速も予備艦の1隻だった。

伊藤　博文(いとう・ひろぶみ)

天保12(1841)～明治42(1909)周防生まれ。元老。明治18年内閣制度を創設し初代首相。25年第2次内閣を組織し日清戦争を指導、下関講和条約調印。38年初代韓国統監。ハルビンで暗殺される

伊藤　正徳(いとう・まさのり)

明治22(1889)～昭和37(1962)茨城県生まれ。軍事評論家。時事新報に入りロンドン特派員。ワシントン会議に特派、日英同盟廃棄をスクープ。昭和4年編集局長。戦後は共同通信理事長、時事新報社長を歴任。著に「大海軍を想う」

「大海軍を想う」から

伊藤正徳は「衆論憤る中に毅然として正論を説いた両博士の立派な態度」を讃え、「人気取り専門の学者が国を誤まり、勇気ある正論の学者が国を救う一大教訓は今日もなお変らない」。ロンドン・タイムズについても「日本にもこのような新聞が欲しい」と書いている。

●東郷こそは「将に将たる器」

▽山本には 東郷が 高陞号撃沈に
確信をもって行動したことが 印象に残った

大戦争の主将には…

山本海相の肚は、遠く日清戦争当時から、「将来危急の場合には東郷」と決めていたように思われる。大戦争の主将には、無神経なほど物に動じない闘将が絶対であり、その点東郷の右に出る者はいなかったからだ（智将は幾人もいたが ― ）　（伊藤正德「大海軍を想う」）

海軍の五・一五事件

明治37年5月15日は、海軍最大の厄日だった。まず濃霧の中、巡洋艦吉野が春日と接触、沈没した。山本海相は、緒戦以来の勝利で油断が生まれたのではないか、と叱責電報を打ったが、そこへ立て続けに戦艦初瀬、八島が、旅順口外でロシアの機雷に触れ沈没の悲報が飛び込んできた。山本もさすがに動揺したが、東郷長官宛てに「沈没の電報に接し、閣下と悲しみを同じうす」友情と激励に満ちた電報を打たせると、呉海軍工廠で巡洋戦艦筑波の着工、日本初の潜水艇建造にかからせた。

一夜で虎の子の戦艦6隻のうち2隻も失い、全艦隊お通夜のように沈み切った中で東郷はどうだったのか。報告に来た司令官、艦長は東郷の顔を見ると、言葉も出ず大声で泣き出した。やっと口をついて出たのは「お許し下さい」の一語。東郷は「ご苦労だったネ」と、静かに一言しただけで茶菓を勧めるのだった。

●黄海海戦（37年8月10日）の「運命の一弾」

▽東郷も 後々まで「あの時はネー」と 苦い顔

東郷は、ここでもついていた

旅順のロシア艦隊が出撃してきた時、日本艦隊は、敵は決戦を挑んできたのだ、まさかウラジオへ逃げ込もうとしているのだとは思ってもいなかった。午後1時過ぎから始まった砲撃戦で敵の進路予想を間違え、一時は3万㍍も離

東郷はイギリスで国際法を勉強

東郷は薩英戦争（文久3年）で、英東洋艦隊の砲撃により鹿児島が火の海になるのを見て、英海軍の力を思い知らされた。薩摩藩の砲弾はタドンを丸めたようなもの。1発撃つごとに大砲が後退りしてしまい、大砲を元の位置に戻さないと、次の発射が出来ない。英アームストロング砲は砲弾の先が椎の実のように尖り、スピードも速く、威力も凄まじい。

新政府の海軍士官になった東郷は、明治4年3月、イギリスへ留学した。ダートマス海軍兵学校は外国人を入れないため少年船員養成のウースター商船学校に、26歳の年を16歳と偽って入学し1年10か月間、国際法を勉強した。

帰国は7年2か月後の11年5月。この間、オーストラリアなどへの遠洋航海に乗り組み、国際感覚を肌で身につけた。

ペケナム大佐の見た東郷

英海軍観戦武官として、戦艦朝日に乗っていたペケナム大佐（のち提督）は翌朝、こんな光景を目撃した。

巡視に来た東郷は、いつもと変わらない穏やかな顔だった。足固く踏み、胸正しく張り、温顔に威を湛え、前日の惨事の影などは全く見られない。心配で眠れぬ一夜を過ごした将兵は「あたかも萎れた草花が慈雨に会って一斉に頭を上げた光景」のように、にわかに自信を取り戻していったという。ペケナムは「敗戦を勝利に回らすのは、往々にして、かかる主将の自若たる態度である」と言っている。

艦橋に立ち尽くす東郷

黄海海戦では旗艦三笠も艦橋に3発の命中弾を受けていた。参謀など60数人の死傷者を出したのに、東郷はほんの10㌢かそこらの違いで掠り傷

されてしまった。日本艦隊は15ノット半(時速28キロ)、ロシア艦隊は14ノット。追い付いたとしても夜7時過ぎ。すぐ暗くなってウラジオに逃げられていたろう。

ところが、戦艦レトヴィザンが故障で12ノット半しか出せなくなり、遅れ出した。皇帝命令は「全戦艦でウラジオへ行け」— 専制国家ロシアでは皇帝命令は絶対だった。全艦減速し、日本艦隊は午後5時半過ぎに追い付けた。それから1時間、両軍は並んで走る形で砲撃戦を展開したが、形勢は五分五分だった。

午後6時37分、12吋砲弾1発が先頭の旗艦ツェザレヴィッチの司令塔に命中した。この1発が司令長官ウィトゲフト少将、艦長、幕僚を薙ぎ倒し、水兵が左に舵をとりっ放しのまま戦死。旗艦は大きく円を描くように左に回り始め、後続の軍艦がこれに続こうとしたところへツェザレヴィッチが狂ったように突っ込んできて、ロシア艦隊は支離滅裂となった。ツェザレヴィッチは膠州湾に逃げ込み武装解除、残る5隻も旅順に舞い戻るのがやっとだった。

もし、旅順艦隊の半分でもウラジオに入っていたら、日本海の制海権は脅かされることに。まさに「運命の一弾」だった。

●旅順に逃げ帰ったロシア艦隊は、第三軍が二〇三高地を占領(12月10日)すると、そこからの砲撃で全滅

▽連合艦隊は 内地に帰り 艦艇修理など
　バルチック艦隊を 迎え撃つ準備に

▽参謀長・島村速雄少将は
　艦隊首脳部の入れ替えを 決断した
　自らケジメをつけ 戦隊司令官に回り
　　参謀長は 加藤友三郎少将に

▽駆逐艦長などは 総入れ替え
　代わっていないのは
　　東郷と 作戦参謀・秋山真之中佐くらい

●「四分の運」は、誰が、どのようにして開いたのか

▽日英同盟(明治35年1月締結) 科学力 技術力も威力

一つ負っていない。東郷は「指揮官としての自分の役目は艦橋に立ち尽くして死ぬことだ」参謀たちが心配して「司令塔の中へ」と勧めても「あそこは見えにくいのでネー」

どんなに砲弾が飛んできても、微動だにせずに立ち尽くす。艦橋は波しぶきでびっしょり濡れていたのに、東郷の立っていた所だけは靴の跡がくっきり乾いて残っていたという。

島村　速雄(しまむら・はやお)

安政5(1858)～大正12(1923) 土佐藩出身。海軍大将。戦艦初瀬艦長を経て明治36年10月常備艦隊参謀長となり12月連合艦隊参謀長。38年1月第2艦隊司令官。海兵、海大校長、佐世保鎮守府長官歴任し、大正3年軍令部長。死後元帥

加藤　友三郎(かとう・ともさぶろう)

文久1(1861)～大正12(1923) 広島安芸藩出身。海軍大将。明治36年第2艦隊参謀長。38年1月連合艦隊参謀長。次官、第1艦隊長官を歴任、大正4年海相。ワシントン会議全権として海軍軍縮条約を纏め11年6月首相。在任中死去、元帥追贈

秋山　真之(あきやま・さねゆき)

慶応4(1868)～大正7(1918)伊予松山藩出身。海軍中将。好古陸軍大将の弟。明治30年6月米国留学、英国駐在を経て35年海大初代戦術教官。36年常備・連合艦隊作戦参謀となりバルチック艦隊を破る。第1艦隊参謀長、大正3年軍務局長

東郷続投には…

明治天皇も出席された昼食会で、ある大将が海軍の自慢ついでに、「わが海軍には東郷に代わるべき者はいくらでもおります」天皇はすぐさま「まだ東郷は代えるべきでない」御座所

▽「連合艦隊勝利」のシナリオ 書いたのは秋山

秋山真之起用には…

参謀長はすぐ島村に決まったが、東郷はしばらく艦隊を離れていて、中佐、少佐クラスを知らない。親任式(10月18日)の帰り、副官の田中治平大尉に「どんな人がいるか調べてほしい」海軍士官の定宿に帰った田中は、東郷から「今度の艦隊編成で幕僚を誰にするかは一番機密なことだから、絶対によそに洩れないように」と念を押されており、誰かに相談するわけにもいかず、出るのは溜め息ばかり。

たまたま隣室にいたのか、「千秋和尚」とあだ名されたほど、面倒見のいい3期先輩の千秋恭二郎(せんしゅう・きょうじろう)少佐。「同じ海軍の仲間じゃないですか。僕のような者でもよければ相談に乗ろうじゃないか」田中が重い口を開くと、海軍省から人事資料を抱えて戻って来た。

翌朝、田中が東郷に復命した名前は中佐から山屋他人、佐藤鉄太郎、少佐から秋山の3人。秋山と同期の千秋は「こいつ出来る。こいつに限る」と激賞したという。しばらく考えていた東郷は、山屋の上に黒線をスーッと引いた。秋山の前の海大教官で戦術の大家として知られていたが、東郷は春の常備艦隊演習見学の際、東軍の作戦計画を立てた山屋が、慎重に過ぎ、攻撃的強さの足りないのが不満だった。逆に、西軍の秋山は荒天に見舞われた時の作戦転換が見事で、印象に残っていた。山屋の代わりに有馬良橘中佐を書き入れた。

艦隊首脳部人事は、明治36年10月28日付官報で発表され、海軍はこの日、常備艦隊を解散して連合艦隊を編成、日露戦争の体制を整えた。

●秋山真之は、日露の戦いに全知全能を絞り切ったように、５０歳を目前に病死(大正7年2月4日)した

「知謀湧くが如し」

追悼会で、島村速雄大将は挨拶した。「日露戦争の艦隊作戦はすべて秋山の頭脳から出たものです。彼の筆によって立案されたものは、ほに下がられてから、侍従に「東郷を代えてはならぬ。山本にそう申せ」

山屋　他人(やまや・たにん)

慶応2(1866)～昭和15(1940) 岩手南部藩出身。海軍大将。明治31年海大教官となり常備艦隊参謀、海大校長、軍令部次長を歴任し、大正9年連合艦隊長官

有馬　良橘(ありま・りょうきつ)

文久1(1861)～昭和19(1944) 和歌山県生まれ。海軍大将。明治36年連合艦隊参謀。旅順口閉塞作戦を立案、指揮官として参加した。第1艦隊長官、海兵校長、教育本部長。昭和6年から明治神宮宮司

海軍一家の皇太子妃雅子さん

父方の曾祖父が江頭安太郎中将、母方の曾祖父が山屋他人大将。

他人という変わった名前は、厄年生まれの子は一度捨てて他人に拾って貰わないと丈夫に育たない ― こんな迷信があり、父親が、捨てたり拾ったりは面倒だと初めから他人にしちゃえばいいと、命名したという。

江頭　安太郎(えがしら・やすたろう)

慶応1(1865)～大正2(1913)佐賀県生まれ。海軍中将。明治30年巡洋艦高砂回航員として英国出張。日露戦争では、大本営参謀として情報収集に当たり人事局長を経て44年軍務局長

兄好古の言葉

弟真之には、兄として誇るべきものは何もありません。ただ一つ、私が言えるのは、真之はたとえ片時でも「お国のため」という観念を捨てなかったことです。このことだけは、兄としてはっきり言い得ることです。

とんど常に、即座に東郷司令長官の承認を得ました。彼が様々に錯雑してくる状況を、その都度、整理統一していく才能に至っては、実に驚くべきものがありました。彼はその頭に、こんこんとして湧き出て、尽きることのない天才の泉というものを持っていました」

●日本海海戦の開幕を告げる有名な電文

「敵艦見ユトノ警報ニ接シ連合艦隊ハ
直チニ出動之ヲ撃滅セントス
本日天気晴朗ナレドモ波高シ」

▽明治３８年５月２７日 午前５時１０分
鎮海湾に待機していた 連合艦隊旗艦三笠が
東京の大本営に打電した 第一報

▽電文の前半は 参謀・飯田久恒少佐（のち中将）が書いた

「撃滅」という決定的な言葉

前年暮れ東郷は参内して戦況報告をしたが、天皇からバルチック艦隊との戦いの見込みを聞かれ、「誓ってこれを撃滅致します」 天皇に対する言葉は絶対的な重み。山本海相は「東郷のやつ、とんでもないことを言上して」とぼやいたが、東郷は「陛下の心配そうなお顔を拝していると、ああ言うよりなかった」

東郷は自分自身に撃滅を言聞かせたのだ。いくら海戦に勝っても 、戦艦の何隻かをウラジオに逃がせば日本の海上交通は一遍に脅かされる。朝鮮海峡の補給路を断たれれば、満州の日本軍は日乾しになる。そうとなれば、軍艦という軍艦はは全部沈めてしまうしかない。

飯田参謀は大本営に打つ電報には、東郷が天皇に約束した「撃滅」を使ったのだ。

▽真之は 加藤参謀長の所へ行きかけた飯田少佐を
「待て」といって 止めると
鉛筆で サラサラと書き加えたのが 後半部分

▽海の様子を見て この一句を 入れたわけではない
濃霧に近いほどで 視界は十分でなかった

秋山　好古（あきやま・よしふる）

安政6（1859）～昭和5（1930）伊予松山藩出身。陸軍大将。明治20年からフランスに4年留学。日清戦争後に乗馬学校長を務め、日本の騎兵の基礎を築く。36年騎兵第1旅団長となり、日露戦争で勇名を馳せる。騎兵監、教育総監を歴任し予備役後は、郷里松山の私立北予中学校長

中外商業新報（5月30日朝刊）

海軍大勝 五月廿七日以来継続中なる日本海海戦に関する聯合艦隊司令長官東郷平八郎の報告如左

其一 敵艦見ゆとの警報に接し聯合艦隊は直に出動之を撃滅せんとす本日天候晴朗なれ共波高し

其二 聯合艦隊は本日沖の嶋付近に於て敵艦隊を邀撃し大に之を破り少なくも四隻を撃沈し其他には多大の損害を与へたり

海軍は大言壮語を嫌った

明治の初め英海軍の指導を受け、理数系の頭がないと動かせない軍艦を相手にしているせいか、現実認識を大切にし、大言壮語を嫌う風潮があった。太平洋戦争中でも平出英夫海軍報道部長が「わが無敵海軍」などと言うと苦々しげな顔をした士官が多かった。

軍艦の名前も優しい。戦艦は国の名、巡洋艦は山と川。気象、草花からとった駆逐艦は卯月、水無月、夕霧、春雨、野分に菫 ―「海軍はたるんでいる。待合の名前ばかりつけて」と怒った人がいた。

岡田　武松（おかだ・たけまつ）

明治7（1874）～昭和31（1956） 千葉県生まれ。中央気象台に入り、明治37年予報課長。大正12年から昭和16年まで中央気象台長を務め、日本の気象観測の基礎を確立した。24年文化勲章

▽真之の机の上には
　前日 中央気象台が出した 天気予報
▽予報課長・岡田武松は 考え抜いたあげく
　「天気晴朗なるも波高かるべし」
　真之は「波高シ」と 断定した形で拝借した
▽この一句を加えたことで
　「単なる作戦用の文章が
　　情景躍動する文学になった」と言う人も
▽飯田少佐は「あの一句を挟んだ一点だけでも
　われわれは秋山さんの頭脳には遠く及ばない」
▽真之の「勝利宣言」でもあった
　短い電文の中に 日本艦隊の勝因の全てが…

●海軍切っての戦術家は、どのように誕生したのか
▽大学予備門時代（東京帝大予科） 大変な自信家

正岡子規の真之評

伊予松山ニ人アリヤト問ハバ、君ハ自ラ我ナリト答ヘン。大学予備門ニ人アリヤト問ハバ、君ハ自ラ我ナリト答ヘン

▽兵学校では 勉強しないでも いつもトップ

カンのいい人だった

試験の出題を当てる名人だった。どうしてわかるのかと聞かれて「教官が講義するとき、よく注意していると、自分の好きな所、大事な所は、教官の顔つきも物の言い方も違う。そこに印をつけておくと、試験は必ずそこから出る」

▽普通は 学校を出ると 勉強しなくなるが
　真之は 卒業してから 猛烈に 勉強を始めた
▽軍艦勤務から 上陸してくると
　それまで読んでいた本は 全部 売り飛ばし
　　新しい本を しこたま 買い込んだ

●アメリカ留学（明治30年6月）が、真之の第二の転機
▽広瀬武夫ら 4人の留学生に ハッパをかけた

「戦略、戦術を勉強する」

「今までの留学生は、ただその国の海軍技術を身につけて帰ってきただけだ。これからは、あんなことではダメだと思う。わしたちは、外

真之と好古

真之は明治維新の最中、松山藩の下級武士の五男として生まれた。寺へ預ける話が出た時、「自分がおあしを一杯稼ぐから、寺へやらないでくれ」と頼んでくれたのが好古だった。この9歳の決意を守るため学費のかからない陸軍士官に入って、騎兵将校になり、真之を松山中学、大学予備門へと入れてくれた。

真之も、その頃の青年がそうであったように「身を立て家を起こす」ことを目標としていたが、折角入った予備門を1年で退学し、海軍兵学校に転じたのも、いつまでも学費を兄に甘えていられぬ気持ちからだった。どんな客が来ても、床の間を背に傲然と踏ん反り返っていた真之が、好古にだけは、座布団を丁寧に引っ繰り返して席を譲った。

好古が色白で背が高かったのに対し、真之は母貞に似たのか、色黒で小柄。目が小気味いいほどに光っていて走ると弾丸のように速い。ガキ大将で、余りに悪戯がひどいので貞が短刀を突き付け「母さんもこれで死ぬけん、お前もこれでお死に」と迫ったことがあった。貞は日本海海戦勝利を聞いて6月19日、77歳の生涯を閉じたが、好古は郷里の知人への葉書に「真之ガ働キシ故、号外ヲモチテ亡父ノ処ニ参リ候ナラント存候」

正岡　子規（まさおか・しき）

慶応3（1867）～明治35（1902）松山出身。俳人・歌人。秋山真之とは松山中学以来の親友。写生主義を掲げ、新聞「日本」を舞台に俳論、句作、随筆などで活躍。「ホトトギス」を創刊して、高浜虚子など多くの俳人を育てた。明治29年、カリエスにより長い病床生活に入ったが、「墨汁一滴」「仰臥漫録」「病牀六尺」など、優れた随筆を発表した

国から学ぶだけでなく、それを突破して、外国のエッセンスを自主的に使いこなせるようになるまで、抜け出さなければ嘘でしょう。わしはアメリカへ行くから、戦略、戦術といった方面で、それをやってみる積もりです」

●真之は、マハン海軍大佐に戦略、戦術を学んだ
▽マハンは「過去の戦史を実例で調べなさい」
▽真之が注目したのは 新興のアメリカ海軍
　大砲も設備も 一番 科学的に装備されていた
▽真之の出した結論は これからの海軍は
　科学的な頭脳 知識を持った将校が
　　中心となって 指導しなければダメだ

●「艦隊の作戦は全て秋山に任せる」
▽日本海軍の この絶大な信用は
　米西戦争 サンチャゴ海戦(明治31年7月3日)に従軍
　　報告書が 正確な事実分析 鋭い観察力で
　　海軍上層部を 驚嘆させたことに始まる
▽「極秘諜報第118号」は
　米海軍の用兵 近代兵器の効力を分析し
　米艦隊が どう戦い どのようにして勝ったか

坂本俊篤大佐(のち中将、海大校長)の言葉

「調教師が夢に描いた幻の名馬に出会ったような気持ちだった」真之は35年7月、坂本に招かれ、海大の初代戦術教官になった。

▽「秋山兵学」は 大変な 名講義だった

山梨勝之進の言葉

「戦略、戦術を体系づけた、飛びつきたくなるように魅惑的で、胸のすくような講義だった。アメリカ海軍の科学的方法と組織を日本海軍に導入したのは秋山だった。とにかく、のべつ頭が活動している人でした」

●真之の頭の中は、ロシアとの戦いだけ

水野広徳の見た日露戦争当時の真之

「背はあまり高くはないが体はガッチリと締

広瀬　武夫(ひろせ・たけお)
慶応4(1868)～明治37(1904) 大分県竹田市の岡藩出身。明治30年ロシア留学。日露戦争に戦艦朝日水雷長として出征し、第2次旅順口閉塞作戦で福井丸を指揮して戦死。海軍中佐に進級。「軍神」と称揚され、神田須田町に銅像が建つ

マハン(Alfred Thayer Mahan)
1840～1914 米海軍軍人。世界的な海軍戦術の権威。海軍力に関する理論づけを行い、各国の海軍整備に影響を与えた。著に「歴史に及ぼす海軍力の影響」

マハンの教え

「戦史は古代も近代も、海上も陸上もひっくるめて、どうして勝ったか、どうして負けたか、勝敗の原因に目をつけて調べなさい。それから大家の立派な意見、尊い体験や疑い得ない法則を大家の著書から読み取りなさい。そうしているうちに段々貴方自身の考えがしっかり生まれてくるでしょう」

山梨　勝之進(やまなし・かつのしん)
明治10(1877)～昭和42(1967)宮城県生まれ。海軍大将。昭和3年海軍次官。ロンドン軍縮条約締結に奔走し、佐世保・呉鎮守府長官を経て、8年条約派として予備役編入。14年から21年まで学習院長

真之が講義で強調したのは…

「戦術は生きものだから人の書いたものを読んでも極められない。一人一人が自分の研究で会得するしかないし、またそういうものでなければ、実戦で役に立たない」
しかし、日本海軍も組織が大きくなって、法則が一つ出来ると、それが全てを縛っていくようになる。

まって、顔は文字通りの炯眼隆鼻。眉が濃く、口が締まり、俊敏精悍の相貌を現していた。辺幅を飾らず、細行を顧みず、挙措極めて無頓着で、むしろダラシがないという方に近い。気取らざる東洋豪傑風の趣があった」
好古は、戦場でも水筒にブランデーを詰めて飲んでいたほど、大変な酒好きだったが、真之は煎り豆。街を歩いていても、三笠の作戦室でも、戦闘中の艦橋でも、所構わずポケットから煎り豆を掴んでは、ポリポリやっていた。話が面白くないと思えば、勝手に本を読んでいる。司令長官が食事中でも、自分に用があれば、サッサと退席してしまう。

▽真之の同期生は
「傍若無人だが、秋山は
我々の思いもつかないような、先を見ていた」

●独自の戦術「丁字戦法」「乙字戦法」を編み出した
▽「六六艦隊」を 総合戦力として使うには
どんな陣形をとったら いいのか
どういう隊形をとると 命中率がよくなるのか
▽ヒントは 先輩の小笠原長生少佐から借りた
村上水軍の兵書「能島流海賊古法」
「わが全力をもって 敵の分力を打つ」
▽丁字戦法は こちらの艦隊が 横一線になり
敵艦隊の頭を 丁の字のように押さえ
砲弾を 先頭の軍艦に集中
立ち上がりざま 1隻か2隻を撃破する
▽乙字戦法は 巡洋艦戦隊の スピードを生かし
乱れかけた敵艦隊を 乙の字のように 挟み撃ち
▽開戦1か月前(明治37年1月9日)
「連合艦隊戦策」として 採用された
▽真之の講義を聞いて 演習を 何度も繰り返し
完全に 頭に叩き込んだ 学生が
開戦と共に 第一線艦隊参謀として 配属され
真之のシナリオ通り 全軍 一糸乱れず行動

●ニコライ二世が、バルチック艦隊の極東派遣を天下に公表したのは37年5月20日だった

水野　広徳(みずの・ひろのり)
明治8(1875)～昭和20(1945) 愛媛県生まれ。海軍大佐。日本海海戦で「此一戦」を刊行。大正10年軍籍を離脱、軍事評論家として当局の厳しい監視の中、「日米戦うべからず」、軍備撤廃や軍人の政治干渉反対を訴え続けた。敗戦直後死去

小笠原　長生(おがさわら・ながなり)
慶応3(1867)～昭和33(1958) 江戸生まれ。幕末の老中・唐津藩主小笠原長行の長男。海軍中将。宮中顧問官となり東郷の秘書役を務める。著に「撃滅」「東郷元帥詳伝」「海戦日録」

「連合艦隊戦策」

本戦策ハ、我ガ連合艦隊ガ略(ほぼ)均勢ノ敵艦隊ト洋中ニ遭逢シテ、コレト決戦スル戦法ノ綱領ヲ示スルモノナリ
(一)第一戦隊(戦艦戦隊)ハ、最モ攻撃シ易キ敵ノ一隊ヲ選ビ、ソノ列線ニ対シテ左記ノ如ク丁字ヲ描キ、可成的敵ノ先頭ヲ圧迫スル如ク運動シ、且臨機適宜ノ一斉回頭ヲ行ヒ、敵ニ対シ丁字形ヲ保持スルニ力(つと)メントス
(二)第二戦隊(巡洋艦戦隊)ハ、第一戦隊ノ当レル敵ヲ叉(さ)撃、又ハ挟撃スルノ目的ヲ以テ敵ノ運動ニ注意シ、或ハ第一戦隊ニ続航シ、或ハ反対ノ方向ニ出デ、左図ニ示スガ如ク、可成的第一戦隊ト共ニ敵ニL字ヲ描クノ方針ヲ以テ、機宜ノ運動ヲ執リ、我ガ両戦隊ノ十字火ヲ以テ敵ヲ猛撃スルニ努ムルモノトス
斯クノ如ク戦闘ヲ開始シタル後ハ、第一戦隊第二戦隊ハ特ニ攻撃ノ主従ヲ定メズ、時ノ攻勢ニ準ジテ両隊交(こもごも)、主撃、従撃ノ位置ニ立チ、相呼応シテ一敵ニ対シ猛烈ナル協力攻撃ヲナシ、順次ニ敵ノ他隊ニ及ボス。要ハ唯個々ニ敵ヲ選バズシテ、敵ノ一部ニ我ガ全力ヲ集注スルニアリ

▽７月出港予定が　１０月１５日と　大幅にずれ込む
▽最新鋭戦艦オリヨール(6月末完成予定)を
　待ってだったが　不正工事発覚で　完成が遅れた
▽艦船が　バルト海の内海向きに　建造されていて
　外洋の荒波に　耐えられるよう
　復元力強化の　整備工事が　必要だった
▽ロジェストウェンスキイの前に　待っていたのは
　北海　大西洋　アフリカ南端の喜望峰を回り
　インド洋　シナ海と　３万２千キロの大航海
▽結果的に　７か月余りもかかったのは　日英同盟
　遠大な航路の大半は　イギリスの勢力圏
▽ロシアとしては　同盟国フランスの植民地
　マダガスカル　印度シナの港が頼りだったが…

●石炭との戦いでもあった
▽一説には　２４万トンの膨大な石炭
▽ドイツの船会社と契約　１００隻近い貨物船を
　航路の要所要所に配置　洋上で　石炭を補給
　飛び石伝いに　極東へ向かう計画だった

●バルチック艦隊は３７年暮れ、マダガスカルに着いたが、仏政府はディエゴスアレス軍港への入港拒否
▽軍艦修理もできず　上陸休養もとれないまま
　マダガスカル北端の漁村　ノシベに停泊
▽日本から　中立国違反を指摘された　独船会社が
　石炭船同行を　断ってきたため
　その手当てに　炎熱地獄ノシベに　２か月半滞在
▽病人は出る　巡洋艦マライヤでは　暴動騒ぎ
▽ネボガトフ少将の　増援艦隊派遣が決まり
　カムラン湾(仏印)で　合流するよう　皇帝命令
▽バ艦隊は　３８年４月１４日　カムラン湾到着
　仏政府に　領海内停泊を断られ
　増援艦隊を待って　１か月も　近海をうろうろ
▽しかも「海に浮かぶアイロン」老朽艦ばかり
　お荷物以外の　何ものでもなかった

●５月１４日、バルチック艦隊は運命の対馬沖へ
▽日本海軍の　基本方針(37年12月30日決定)は
　全戦力を　朝鮮海峡に置いて
　どのような状況にも　対応できる態勢に

ニコライ二世(Nikolai)
1868～1918　帝政ロシア最後の皇帝。積極的な極東進出で日英と対立、日露戦争で敗れる。明治38年、国会開設を承認しものの三月革命で退位、銃殺される

同盟国フランスは冷たかった
フランスが、ロシアと軍事同盟を結んだのは、ロシアの強大な陸軍力で、国境を接するドイツを牽制したいからだった。そのロシア陸軍が、日露戦争で極東に釘づけになり、頼りにならない。フランス政府は、海の向こうのイギリスとの争いに巻き込まれないよう、日露開戦と共に英仏協商を結び、バルチック艦隊には極めて冷たく当たった。

石炭確保でつまづいた
当時世界で最も良質な石炭は、煙も出ずカロリーも高い、イギリス・ウェールズ地方のカーディフ炭。日本が日英同盟の誼で大量に確保したのに対し、ロシアは焚くと黒煙が出て品質も劣るドイツ炭しか入手できなかった。
石油なら、海上自衛隊がインド洋でやったように、ホース一本で洋上を走りながら給油でできるが、石炭の場合は、軍艦を止めて、まず補給船からハシケに石炭を積み替える。次にハシケから軍艦に移す粉塵だらけの作業を、3日か4日ごとに繰り返さねばならない。

真之が考えた「七段備(かまえ)」
一撃の攻撃ではなく、一連のシステム攻撃により撃滅しようとした。
♦第1段(駆逐隊・水雷艇隊の襲撃による攪乱)♦第2段　主力艦による正面攻撃)　♦第3段(駆逐艦・水雷艇による夜間攻撃)♦第4段(主力艦による敵残存部隊の追撃)　♦第5段(第3段に同じ)♦第6段(第4段に同じ)♦第7段(第2艦隊がウラジ

▽どの航路をとって やって来るか
　ウラジオへは 対馬海峡 津軽海峡 宗谷海峡
▽バルチック艦隊が 対馬へ来るなら
　当然 警戒線に かかっていいはずなのに
　　待てど暮らせど やって来ない
▽真之の心は「津軽海峡へ回ったのではないか」
　司令官 艦長も「早く函館へ行った方がいい」
▽連合艦隊司令部は ２５日午前
　２６日夕方からの 北方移動を決意
　軍令部に打電し 三笠で 司令官・参謀長会議
▽午後３時には 津軽海峡移動が 決まりかけた
▽猛然と反対したのが 藤井較一大佐(第2艦隊参謀長)
　島村少将(第2艦隊司令官)も「敵は必ず対馬に来る」
▽結局 この日の移動は 取り止め
　折衷案として ２６日正午まで 待つことに
▽各軍艦には 密封命令(封筒に入れ開封日を指定した命令書)が
　渡されていたが 開封時間も １日延ばした

●まさに、間一髪だった
▽バ艦隊が ２６日正午まで 我慢していたら
　空っぽの対馬海峡を らくらく 抜けていたろう
▽ロジェストウェンスキイが「千慮の一失」
　２５日朝 決戦に備え 洋上で石炭補給
　　夜８時 足手纏いの運送船６隻を 上海へ
▽２６日午前零時５分 上海総領事館
　松岡洋右領事館補(25歳)は「バルチック艦隊は
　　対馬海峡に向かう公算大なり」と 打電した
▽「石炭船、上海入港」は 松岡と親しい
　森恪(三井物産上海支店勤務)がキャッチ 報せたのでは
▽迷いに迷った連合艦隊も 鎮海湾待機を続けた

東郷長官の判断は…

戦後、小笠原長生が東郷に「なぜ、北方移動の電報を打ったのか」東郷は「俺は、そんな電報は知らん」「では長官は、どこへ来ると思っていたのか」東郷は即座に「そりゃあ対馬さ」「東郷は正しい判断をしていた」が、定説になっているが、こんな重要な決定を加藤参謀長、秋山が東郷に無断でするはずがない。「神様の東郷に傷をつけたくない」の情報操作では…。

オストック港口に敷設した機雷源に敵残存部隊を追い込む)
実際の戦闘は、荒天で水雷艇の航行が困難となり、第2段作戦の主力艦による攻撃からとなった。

藤井　較一(ふじい・こういち)
安政5(1858)～大正15(1926) 岡山藩出身。海軍大将。駐独武官、軍令部第2局長を経て、明治38年1月第2艦隊参謀長。軍令部次長、第1艦隊長官歴任

各軍艦への密封命令

(一)今ニ至ル迄、当方面ニ敵影ヲ見ザルニヨリ、敵艦隊ハ北海方面ニ迂航シタルモノト推断ス
(二)連合艦隊ハ、会敵ヲ以テ今ヨリ北海方面ニ移動セントス
(三)本令ハ、開披ノ日ヲ以テ其ノ発令日付トシ、出発時刻ハ更ニ信号命令ス

松岡　洋右(まつおか・ようすけ)
明治13(1880)～昭和21(1946)山口県生まれ。明治37年外務省に入り、上海領事館補。駐華総領事を経て大正10年退官。昭和2年満鉄副総裁。5年政友会代議士。7年国際連盟臨時総会首席全権、翌年満州国否認に抗議し退場。15年、近衛内閣外相となり、日独伊三国同盟、日ソ中立条約締結。A級戦犯で起訴され病死

森　恪(もり・かく=つとむ)
明治15(1882)～昭和7(1932) 大阪生まれ。三井物産上海支店見習社員、天津支店長を務め大正9年政友会代議士。昭和2年田中内閣外務政務次官となり、対支強硬外交を推進。政友会幹事長を経て、6年犬養内閣書記官長

●なぜ、5月27日だったのか？
▽26日は ロシア暦で キリスト教徒の嫌う13日
27日(14日)は ニコライ二世の戴冠記念日
▽長年 侍従武官を務め 皇帝の信任篤い
ロジェストウェンスキイは 最初から
この「佳き日の正午」に 戦艦8隻の威力で
対馬海峡を 強行突破しようと
時間調整をしながら 向かっていた

●信濃丸は27日午前2時45分、暗闇に灯火を発見
▽全艦隊 無灯火の夜間航海で
ただ1隻 病院船のつけていた 明かりだった
▽接近したが もの凄い濃霧で わからない
▽夜が白み 霧が晴れてきた時 見張員の叫び声
右舷にも左舷にも 前にも後ろにも
大小無数の軍艦が 煤煙を吐きつつ 進んでいた
バルチック艦隊の 真っ只中にいたのだ
▽午前4時45分「敵ノ艦隊見ユ地点二〇三」
5時5分 対馬の厳島(巡洋艦)から 三笠に中継
▽起床ラッパで 甲板に出ていた真之は
「しめた、しめた」片足で立って 両手を振り
阿波踊りのように 踊り出した

●「本日天気晴朗ナレドモ波高シ」は、「海戦はこのように展開し、勝ちますよ」
▽天気晴朗は 何度も ロシア艦隊を逃した
濃霧の心配がなく 戦闘時間が たっぷりとれる
▽視界がいいから 命中率が高くなる
三笠だけで 3万発(1年分の訓練用弾丸)
10日間で使い果たすほど 猛訓練
▽火薬は 凄い爆発力の「下瀬火薬」
▽波が高いことは 長い航海をして
訓練不十分なバ艦隊には 射撃も不利に
▽石炭満載で 厚い装甲帯の 吃水線が下がり
船腹に穴が開けば 激流がなだれ込み 沈没する

●東郷艦隊は北から、バルチック艦隊は南から
▽午後1時53分 両軍の距離1万2千㍍で
旗艦三笠のマストにZ旗「皇国ノ興廃
此一戦ニアリ、各員一層奮励努力セヨ」

万全の哨戒網

海戦では、いかに早く敵を発見するかが、勝敗の分かれ目になる。日本海軍はこの決戦に戦艦から水雷艇に至るまで125隻の艦船を動員したが、このうち6割近い73隻を、敵艦隊発見のパトロールに当てた。真之は、佐世保から朝鮮・済州島を結んだ線、その南に一辺300㌔の正方形を描き、碁盤の目のように細かく刻んだ哨戒海域にその73隻を投入した。

信濃丸は、日本郵船の太平洋航路の客船だったが、海軍に徴用され大砲1門を積んだ仮装巡洋艦として哨戒に当たっていた。敗戦後は、南方からの復員船として、よく働いた船だった。

情報の勝利

信濃丸は撃沈覚悟で接触を続け、午前6時5分「敵進路不動、対馬東水道ヲ指ス」。後を引き継いだ三等巡洋艦和泉も6時間も食い付いて離れず、軍艦の数、陣形、位置や煙突を黄色く塗っていることなど実況放送さながらに無電を打ち続けた。

煙突の黄色い軍艦は全て敵だから、乱戦になっても同士討ちの心配がない。東郷と真之だけでなく、全艦隊がまだバルチック艦隊の姿を見ないうちから、全容を知り尽くしていた。

下瀬　雅充(しもせ・まさちか)

安政6(1859)～明治44(1911) 広島県出身。明治20年海軍技手、翌年高性能新爆薬の合成に成功。30年海軍造兵廠主幹。帝国学士院賞受賞

Z旗

信号旗を対角線で四色に仕切り、上は黄、下が赤、右が青、左に黒。常に特定の意味を持っているわけでなく、

▽２時７分 距離８千㍍で 敵前Ｕターン
丁字戦法で バ艦隊の頭を 押さえにかかった
▽２時１０分 三笠が砲撃開始
旗艦スワロフ オスラビアが 大火災に包まれ
戦闘は 最初の３０分で 大勢が決した

●「人間が開いた四分の運」 筆頭は日英同盟
▽バルチック艦隊に 満足な港も 休養も与えず
戦う前から疲れさせてしまった 外交の勝利
▽マルコーニの 無線電信発明(明治28年)から
１０年後に 世界で最初に 無電を実戦に使い
日本海海戦を 制する成果をあげた

開戦ぎりぎり、間に合った無電装置

「二つの地点の通信に電線の代わりに電波を利用した」― アメリカの科学雑誌に載った、マルコーニの成功を伝える雑報扱いの記事に注目した人がいた。逓信省局長石橋絢彦で、目に見えない電波はまだ架空のものと考えられていた時代だった。逓信技師松代松之助は、石橋の指示で研究に当たり、明治30年暮れ、東京月島海岸－品川沖間の2㌔、日本で初めての海上の無電実験に成功した。

米国留学中の真之は、マルコーニが32年4月、嵐の英仏海峡で130㌔の通信に成功すると、ニューヨークに来たマルコーニのインタビュー記事を海軍省に送り、艦隊通信に無線を使うよう提案した。山本海相は33年9月、松代技師を海軍嘱託として招き、海軍教授・木村駿吉博士と共に無電の研究開発に当たらせた。

130㌔の通信ができる無電機開発に漕ぎ着けたのが36年秋。徹夜の突貫作業で製作を急ぎ、主力艦に配備を完了したのが37年1月12日、偵察艦も23日には装備を終えた。

●ロジェストウェンスキイには、多くの疑問
▽なぜ 運送船の上海入港を
本隊の対馬海峡通過まで 待たせなかったのか
▽なぜ 戦闘に役立たない 病院船を同行したのか
その明かりが 艦隊発見のキッカケに

真之が数日前に東郷の許可を得て、「この信号が揚がったら、意味はこういうことだ」と、各艦の信号書に鉛筆で書き加えたものだった。

東郷も真之も英国へ行った時、ネルソンの記念艦ヴイクトリー号のマストに翻る信号旗を見ている。「英国は各自がその本分を尽くすことを期待す」― ネルソンが、全艦隊に向かって最後の信号を掲げさせた時の、あの気迫を再現させようというのだ。

Ｚ旗を見た各艦では、艦橋から伝声管や伝令によって大声で伝えられ、「いよいよ決戦」と士気が上がった。

マルコーニ(G. Marconi)
1874～1937 イタリアの電気技術者。明治28年(1895)無線電信装置を発明し実用化。渡英して無線会社を創立し、大西洋横断無線に成功した

木村　駿吉(きむら・しゅんきち)
慶応2(1866)～昭和13(1938) 江戸生まれ。咸臨丸で太平洋横断の幕府軍艦奉行・木村芥舟の次男。明治26年米国に留学、電気工学を学び、33年海軍通信工学教授・技師。日露戦争で海軍艦艇の無線電信システムを成功させた

海軍の秘密兵器「下瀬火薬」

下瀬が明治21年に開発、26年に下瀬火薬として海軍炸薬制式に採用された。急激なショックを与えると、猛烈な爆発力を持つピクリン酸を使ったが、砲弾に使うには酸化力が強過ぎ、自然発火してなかなか実用化できなかった。下瀬は、酸には滅法強い漆を砲弾の内側に塗ってピクリン酸の完全分離に成功した。

爆風で人間、構造物を吹き飛ばしただけでなく、気化したガスが3千度の

▽ハーグ条約(明治32年7月締結)の 戦時国際公法は
　病院船認識のため 夜間点灯を規定
　諸事 規則に厳格な口長官は それを守らせた
▽巡洋艦ウラルには 強力な無電機を 積んでいた
　なぜ 妨害電波を 発射させなかったのか
▽信濃丸 和泉を いつでも 撃沈できたのに
　なぜ 砲撃許可の要請に「撃つな」と命令したか

ノビコフ・プリボイの「ツシマ」に答え

戦艦オリヨールの艦長は航海経験も豊か、真面目で勇気ある士官だったが、帆船時代の旧海軍に育った人。新式戦艦の機械、装置が精巧であればあるほど、全くわからず、近寄らなかった。測距儀も最新式だったが、いくら測っても距離が合わず、実戦で使うのをやめた。

日本海軍は、山本権兵衛が10年以上も前に若手に切り替えていたが、ロシアは近代化についていけない艦長が軍艦を動かしていた。

口長官の頭にあったのは、皇帝に対する忠誠心だけ。日本艦隊を目前にして、全艦隊に信号で知らせたのは「きょうが皇帝戴冠の佳き日」— どの軍艦でもピーッと笛が鳴って水兵が甲板に集められ、皇帝への祈りを捧げた。

▽戦いが終わってみれば
　負けるべくして やって来た艦隊だった

●日本海海戦は「勝ち過ぎてしまった」
▽連合艦隊は １２月２０日解散
　翌日 旗艦朝日(三笠は火薬庫爆発で沈没)で 解散式
　東郷は「聯合艦隊解散の辞」を 読み上げた
▽真之が 一気に 殴り書きしたものといわれ
　感動したルーズベルト大統領は
　　翻訳させ 陸海軍全将兵に 配布した
▽「古人曰く勝て兜の緒を締めよ」と 結んだが
　一勝に満足して「人間が開いた四分の運」を
　合理的に分析し 将来に生かすことを 忘れた
▽総合力を 大切にする気持ち
　現実的な バランスのとれた
　　ものの見方が 後退していった

高熱を撒き散らし、鋼鉄に塗ったペンキに引火し、軍艦が燃え上がった。海水にぶつかっただけでも炸裂して船腹に穴を開け、砲塔も溶かした。

長いこと軍事機密とされ、太平洋戦争で真珠湾攻撃に使った航空魚雷も下瀬火薬の改良型。

ノビコフ・プリボイ(N. Priboi)
1877～1944 ロシアの作家。戦艦オリヨールに水兵として乗り組み日本海海戦に参加。昭和8年「ツシマ」を書き、第1回スターリン文学賞受賞

弩級戦艦(どきゅう・せんかん)

英国は日本海海戦の教訓を生かし、明治39年12月、12吋砲10門、21ノットの快速戦艦ドレッドノートを建造した。日本が造っていた12吋砲4門の安芸、薩摩は、一夜にして旧式戦艦になった。頭文字をとり弩級戦艦という。

列強海軍は大艦巨砲時代に突入し、16吋砲搭載の超弩級戦艦長門、陸奥と、軍拡競争が始まる。

太平洋戦争の時もそうだった

日本海軍は、航空母艦中心の機動部隊を編成、ハワイ真珠湾を攻撃して、「航空機の時代」という新しい時代の扉を開いておきながら本当の意味を掴んでいなかった。「最後の勝敗を決するのは艦隊決戦だ」と、もう航空機の時代がきているのに、「日本海海戦勝利の亡霊」から抜け出せなかった。

逆に、素早く頭を切り替えたのはアメリカ。戦艦の建造を中止し、空母と航空兵力拡充に振り向け、日本はその航空力に完敗した。